

【災害時の情報伝達】

民間企業が運営する観光アプリに県が配信する多言語防災メールを表示

松江市防災安全部防災安全課

1. 松江市の概要

本市は、山陰のほぼ中央に位置し、広島市から約 180km、大阪市からは鉄道距離で約 370km のところにある。また、市域は東西 41km、南北 31km で、面積は 572.99 平方 km となっている。

本市は、古代出雲の中心地として早くから開け、奈良時代には国庁や国分寺が置かれていた。地名の由来は、慶長16年（1611年）堀尾吉晴が亀田山に城を築き、白潟・末次の二郷をあわせて松江と称したことにはじまる。

江戸時代には堀尾氏3代・京極氏1代・松平氏10代の城下町として栄えた。そして、この頃、今日に見る都市の基礎が形成された。明治4年（1871年）廃藩置県によって県庁が置かれ、同22年4月（1889年）全国の30市とともに市制を施行している。当時は、市域4.78平方キロメートル・人口35,513人であった。

その後、昭和9年から35年にかけて9回にわたり周辺の村を合併、そして平成17年3月31日に八東郡7町村と合併し、さらに平成23年8月1日に八東郡東出雲町を合併し、現在の市域になっている。この間、昭和26年（1951年）には松江国際文化観光都市建設法が制定され、奈良市・京都市と並んで国際文化観光都市となった。

さらに、平成7年（1995年）には出雲・宍道湖・中海拠点都市地域に指定され、山陰の中核都市として発展してきている。

2. 「Ruby City MATSUE」プロジェクト

本市では、「Ruby City MATSUE」プロジェクトと呼ぶ産業振興プロジェクトを進めている。「Ruby City MATSUE」プロジェクトとは、人口減少を背景に、地域再生の活路を見出すため、本市に蓄積する知的財産や地域資源を活かした新たな地域ブランドを創生することを目的とした事業である。本市が注目したのは、本市在住のまつもとゆきひろ氏が開発した世界的に有名なプログラミング言語「Ruby（ルビー）」である。この「Ruby」をはじめとするオープン・ソース・ソフトウェアを市の IT 産業の特色として活用することで、地域の IT 産業の振興を図ることを目的としているものがこのプロジェクトである。

平成18（2006）年から開始したこの「Ruby City MATSUE」プロジェクトの取組みにより IT 企業の集積が進み、一定の雇用が創出された。また、IT 人材の交流拠点「松江オープンソースラボ」の設置により、さまざまなコミュニティが形成されているところである。

3. 無料観光アプリ「縁むすびスマートナビ」による防災メールの多言語表示

無料観光アプリ「縁むすびスマートナビ」は、市内に本拠地を置くソフトウェア企業である株式会社オネストが開発した観光アプリで、このアプリの開発に使われているプログラミング言語が「Ruby」である。本アプリでは、「探す、歩く、見る、発信する」をキーワードに、AR技術を利用するなどして観光情報や施設・店舗・駐車場情報などの幅広い情報を提供している。

また、不測の事態に備えて防災情報の提供もしている。そのひとつが島根県の運営する「しまね防災メール」と松江市が運営する「松江市防災メール」から配信された内容をアプリ内の「防災情報」へ表示させる機能である。県の運営する「しまね防災メール」は多言語（英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、タガログ語）で配信されており、アプリ内での表示はアプリ利用者のスマートフォン端末の言語設定に応じた言語で表示されるため、観光客など行政の登録制メールに登録していない外国人の方でも、「しまね防災メール」で配信された内容を確認することができるようになっている。ただし、多言語表示はアプリが対応する言語（英語、中国語、韓国語）のみに限られる。

当初は松江市の観光用に作成されたアプリであるが、現在は、中海・宍道湖・大山圏域（松江市・出雲市・安来市・米子市・境港市）に運用範囲を拡大している。

